



TITLE:

穂積文雄先生を偲ぶ

AUTHOR(S):

桑田, 幸三

CITATION:

桑田, 幸三. 穂積文雄先生を偲ぶ. 経済論叢 1980, 125(3): 202-210

ISSUE DATE:

1980-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/133809>

RIGHT:

經濟論叢

第125卷 第3号

哀 辭

故穂積文雄名誉教授遺影および略歴

フランス貴族商業論のひとこま 補論 ……………木 崎 喜 代 治 1

比較生産費説・国際価値論・貿易利潤(中)……本 山 美 彦 20

ディルクの剰余価値論(上)……………岸 徹 47

19世紀末ドイツにおける「本源的蓄積」と

土地所有(2)……………加 藤 房 雄 66

追 憶 文

先生の思い出……………伊 達 功 84

穂積文雄先生を偲ぶ……………桑 田 幸 三 92

経済学会記事

昭和55年 3 月

京 都 大 学 経 済 学 會

穂積文雄先生を偲ぶ

桑 田 幸 三

先生が他界されてから1か月有余のある日、穂積邸をお訪ねしたところ、静子夫人が、「こんなものがデスクの抽出にありましたよ」と示されたのが、みずくきのあとも懐しい、先生のペン書きの紙片の束。その数約30枚。大学ノートを横に半分にカットした大きさ。表面に薄ネズミ色のケイ線が10本ばかり横に走り、上の欄外に（ ） No.____, 下の欄外左方に TITLE, 右方に PAGE と印刷されたもの。裏面は無地。1枚日を見ると、Les femmes (1) なる見出しのもとに、箇条書き風に

Mariu ccia (S.) Vol. VII. Ch. IX. p. 185—

(F.) Vol. IV, Ch. XIX, p. 481 *

というように、ギッシリ埋っている。2枚目は Les Femme (2) で、同様に、ほぼ一面にメモが記され、欄外左方に Don Quixhote, I. p. 105 とある。3枚目には上の欄外に Chanson D'automne. Paul Verlaine とある。3, 4枚下は Montaigne, “Essay” からの抜き書きで末尾に——和訳、関根秀雄、白水社、縮刷版, pp.609—10——とある。更に3, 4枚下には “Jacob Casanova Memorie” の抜き書き、その次には、斎藤監物「題児島高德書桜樹図詩」および頼襄「題不識庵攀機山図詩」が。またその次には、⁶⁰⁹懶なる見出しの下に、「俊基朝臣再関東下向事」（太平記巻第二）の華麗な文章が4枚にわたって抄出されている。かと思うと、その次には “Rasselas” の書き抜きが6枚にわたって書かれ、英文2, 3行ごとに訳がつけられている。その訳の部分拾って見ると次のごとくである。

人生は至るところ忍ぶべ（き）こと多く、楽しむべきこと少い場所である。

結婚生活には苦しみが多いが、独身生活には楽しみがない。

我等は水火風雲の運動を改め、或は国家の運命を定めようなどとは努力すまい。我等の務は我等の如き者が何を為し得るかを考へるにある。

実の如、何人も現在に関し多く心を勞するものではない。回顧と予想とが、我等の生涯の殆ど凡てを充たす。

汝等、空想の囁きに耳を傾け、希望の幻を熱心に追ふ人々よ。

ヴォルテール、ジョンソンの共通の敵は、この世界をは「凡ての可能なる世界の中の最善なるもの」(the best of all possible worlds)と考へ、物凡て十分なる理由ありて存在する故に、凡ては最善の目的に叶ふとする Leibnitz 流の楽天観である。」(ibid, p. 154)

但し動機はちがう。

- ④「ヴォルテールのそれは全く polemical である」(p.154) 信仰破壊、懐疑思想流布
 ⑤ジョンソンの動機は全く実践的、倫理的である (p.154)「快楽よりも苦痛多きこの世なればこそ、宗教の力が必要だと主張するのである」(p.154) 彼の深味のある人格と悲痛なる体験とが楽天説を懐くことを殆ど氣質的に不可能ならしめた」(レズリー、スティーヴンの説、石田本p.154)『ラセラス』は道徳に関するエッセイの連続である。(p.158)

以上のような、メモ風の先生の直筆にふれて、私の頭に浮んだのは、前に読んだ、梅棹忠夫教授の『知的生産の技術』岩波新書1969. である。梅棹教授が、1 発見の手帳、2 ノートからカードへ、3 カードとそのつかいかた、というあたりで解説しておられる、いわゆる「京大カード」のことである。そう言えば、梅棹教授は京大人文科学研究soでの共同研究が機縁になって、このカードの原型が出来上ったように述べておられたが、穂積先生も、嘗つて何年にもわたって同研究所に兼務しておられたことがあると承っていた。

穂積先生のものされた論文に見られる、あの、当意即妙と言うか、臨機応変と言うか、美事な比喻や引用のテクニックの秘訣は、このカード・システムの活用にあったのではなからうか、と思い当たったのである。たとえば、経済論叢に掲載された最後のエッセイ『王莽の社会思想について』(これは、私の記憶によると、先生の退官記念講義と同じテーマではなかったかと思うが)をひもといて見よう。冒頭に孟子と長谷川如是閑の言葉が対置されている。いわく。

孟子「ことごとく書を信ずれば書なきに如かず」

如是閑「ことごとく書を信ぜざれば書あるに如かず」

そこへ露伴学人が登場する。

酒を飲んで酒に飲まれるなということを何処かの小父さんに教えられたことがある

が、書を読んで書に読まれるなどは、酒に飲まれたよりも詰らない話だ。人を飲むほどの酒はイヤにアルコールの強い奴で、人を読むほどの書も性がよろしくないのだろう。そんなものを書いて貰はなくてもよいから、そんなものを読んでやらなくてもよい理窟で、「一枚ぬげば肩がはら無い」世をあっさりと春風の中で遊んで暮らせるものを、下らない文字といふものに交渉をもって、書いたり読んだり読ませたり、挙句の果には読まれたりして、それが人文進歩の道程の、何のとは、はてあり難いことではあるが、どうも大抵の書は読まぬがよい、大抵の書は書かぬがよい。……（下略）ここで、穂積先生がおもむろに姿をあらわして、総括を試みられる。

しかしながら、そういう口の下、いや、筆の下から、文を書き、書をつくっているのであるから、かならずしも、書を読むな、と、いうわけでも、あるまい。要は、やはり、書は読むべし読まるべからず、書を読むはよろしいが書に読まれざること、なお、酒を飲んで酒に飲まれることなきがごとくなれ、というにおちつくものと解すべきであろう。そう解してさしつかえあるまい。そういえるであろう。

と。これで第1ページが終る。この調子で84ページに及ぶのであるから、王莽の社会思想究明の過程で登場する人物は夥しい数に上る。実に枚挙にいとまが無い程である。それがまた、古今、東西にわたって、目もあやなばかり。すなわち（敬称略）

秦始皇帝。鶴岡一人。桑原隲藏。シェークスピア。志賀直哉。アンドレー・モローア。セイヤー。班固。荀子。渡辺一夫。小島祐馬。Karl Bücher. Arthur Young. 阮阮。司馬遷。孔子。劉宝楠。管仲。犬養毅。穂積陳重。加藤繁。那珂通世。前漢宣帝。等々。

さらに、引用された古今・東西の文献の数も、これに劣らぬばかり。これら数多の人物の言葉や、書物の一節が、それぞれ適切な処にちりばめられて、ここに先生の論文が成り立っている。天空に星辰をちりばめたように美事な布置の妙はいかにして可能となるのか、その秘密を解くキー、その少くとも一つのキーは、このカード・システムの活用にあるのではないかと私は思うのであるが、いかがなものであろうか。記憶力に頼らず、確固たる典拠によって立論するためには、常々読書の間、思索の間に脳裏に浮ぶアイディア、発見の類を、いち早く何かに書きとめることが有効である。それを、どんな形式で実行・継続し、蓄積・貯蔵し、活用するか、そこに「知的生産の技術」のポイントがあると思う。先生が、長い研究生生活の体験から、最終的に到達されたのが、この

カード・システムに他ならない、と私は推察するのである。限りある記憶力、手帳、ノート・ブック、ルース・リーフ式ノート、等に頼っているのは、到底、あれ程美事な「引用の妙」は成し遂げられないと思うのである。しかも、カードの大きさ、紙質と印刷等の点においても、理想的な形式を開発されている、ということは、研究一すじに生きられた先生としては、むしろ自然の成りゆきであったのでもあろう。今ごろになって、そのことに感嘆しているのは、私自身の未熟を告白するようなものと言うべきであらうか。

引用の多用については、こういう疑義を唱える人もある。いわく、引用の多いことは、むしろ恥ずべきことである。それだけ他人の言説に頼るわけで、自分の創造にかかわる部分が少いということになるから、と。これに対し、先生は、こう答えられるであらう。

(ひとつのアイディアについて) 先蹤があるとき、それは個々の点についてみる場合のことである。それらを綜合集大成した構想の全体そのものについてみれば、はなしは、また、別となるであろう。たとえば、ここに芭蕉の俳句、「なつくさや、つわものどもが、ゆめのあと」を、みよ。それを構成することば一つ一つをとって、いえば、それは何人もがもちいきたり、もちいつづけるところのものである。その先蹤をたづねれば、そのかずは涙のまざりよりも多い。蒼空の星もおよばぬ。それほど多い。そういってもよいであろう。しかしながら、それらを全体として一つの俳句として、とらえるときは、それは、まったく、俳聖独自のものである。ほかのたれのものでもない。ただ一人の先蹤も存しない。

と。(名古屋学院大学論集 Vol. 7 No. 1, March 1970, 「アナトール・フランスのユートピア」(2)より)

穂積文雄先生、と言え、多くの人が「ああ、あの博学の」と言い返される。先生の博学は、いままで述べてきたところによっても十分に証明されるであろう。『東洋経済史』の中で先生は、詩経から「闕宮」を取り上げて 泰山巖巖 魯邦所唐 奄有龜蒙 (下略) のところに、次のような訳をつけておられる。

高くそびえる泰山も魯の版図内にある。さらに龜山・蒙山も、また魯の版図の中にある。(下略)

思うに、山は高きを以て尊しとするが、その裾野が立派で広々としていることによって、山の尊厳が一段と加えられる。先生の専攻分野における研究は高邁なることを

俣たないが、それは、博学、広大な教養の裾野によって、一段と光彩を放っている。先年、この『東洋経済史』の上梓を祝って、かつて東亜同文書院時代に先生に親炙された石田達系雄（武夫）教授が詩を賦して

博覧洋書貫古今

詳察典籍通南北

と詠まれたが、全くその通りかと思う。『言志後録』に

人の一生の履歴は、幼時と老後とを除けば、率ね四五十年間に過ぎず。其の聞見する所は、殆ど一史だにも足らず。故に宜しく歴代の史書を読むべし。上下数千年の事跡、羅して胸臆に在り。亦、快たらざらんや。眼を著くる処は、最も人情事変の上に在り。

とあるが、先生は正にこの「快」の境地に達しておられたものと思う。一齋はまた、

山獄に登り、川海を渉り、数千里に走るに、時あつてか露宿して寐ねず、時有つてか饑うれども食はず、寒ゆれども衣ず。此は是れ多少実際の学問なり。夫の徒爾として、明窓淨几、香を焚き書を読むが若き、恐らくは力を得るの処少なからむ。（言志録）と、山野跋涉・諸国遍歴の実際の学問たる所以を説く。

先生は、愛媛県宇和島に幼・少の時を過し、長崎ならびに京都に修学の間を求め、勇躍、中国本部の上海に移って青・壮年期の十有二年間を過し、再び京都に戻って四十有余年の歳月を送り迎えられた。その間、2年間のドイツ留学、2か月にわたる中華民国（華北方面）への出張、1年間のアメリカ合衆国出張、さらに、昭和47年4・5月の間には夫人同伴、アラスカ——モスクワ——ロンドン——パリ——ベルリン——ベルン——マドリッド——ローマと、ヨーロッパの枢要の地を巡歴された。日本国内も遍く足跡を印せられ、時には私どももお伴して「実際の学問」を体験させて頂いたものである。

日比野丈夫教授は、その著『中国歴史地理研究』の中で、

史記が古来絶世の名著として賞讃されるのは、著者の司馬遷が豊富な史料を駆使し、異常な熱意をもって暢達な筆をふるった結果であること、あらためていうまでもないであろう。それとともに、かれが稀代の旅行家であり、当時としては驚くべき広汎な地理的見識をもっていたことが、無限の説得力を添えているのを忘れてはならない。

と述べておられる。先生の場合も、上記のような大小あまたたびの旅行、外地留学、長

期滞在の体験が、先生の研究活動の上に重大な影響を及ぼしているであろうことは、想像に難くないところである。先に見たような、論理の展開に伴う考拠引証の的確、博引旁証の壮観は、単に明窓浄几のもとにおいてのみ成ったものではなく、足で踏み、目に見、耳に聞く、実際の体験によって裏打ちされた、筋金入りのそれであった、と考えるのは、はたして私ひとりの管見であろうか。

先生の思想史や文学についての造詣は、「社会思想史」の講義と研究においても遺憾なく発揮されました。その一端は、イギリスのラダイツを生き生きとえがいた『英国産業革命史の一断面』によく示されております。

先生はその深い学殖の反面、性洒脱にして坐談の名手であり、わたしたちは大いに喜ばせて頂きました。

上の一文は、経済論叢第97巻第1号「穂積文雄教授記念号」（昭和41年1月）に載せられた、岸本英太郎経済学部長の「献辞」の一節である。先生の風貌は巻間にも漏れ伝えられていたようで、たとえば、『京都新聞』は

社会思想史の穂積文雄は、かつて東亜同文書院に在職したこともあり、先秦経済思想史など中国古典の研究で知られているが、昨年「英国産業革命史の一断面」で学位をとった。産業革命のはじめに起った機械破壊運動に関するものだが、余り人が手がけられないものだ。ひょうひょうとした感じだが、講演・座談などは堂に入ったもので、知らぬ顔をしていて、笑わせるコツをのみ込んでいる。（新大学物語、京大編、経済学部④、昭和33年2月12日付）

と伝えている。また、『朝日新聞』は「座談も上手・シナ通の穂積」という大見出しで、

ひょうひょうとしてとらえどころがないように見え、新聞逆読論など座談がたくみの評。新聞逆読論というのは新聞に自殺の記事が出るのは人間に生命への執着が強い証拠だし、汚職記事が大きく載るのは道義心いまだ衰えぬのしるしなのだそうだ。

（京都学界山脈、経済学界、昭和32年3月17日付）

と報じている。先生が座談の名手であったと言うことには、どなたも異論がないところかと思う。私は、大学院などで座談的な指導を受けた体験から、そこに「人を見て法を説く」一面があったように思う。相手の能力や性格に応じて納得、理解できるように、難しい真理を噛みくだいて説明する、いわば積尊的な大きな慈悲の心を感じたのは、私

ひとりではあるまいと思う。このことは、ひとり座談あるいは小人数の授業に限らず、講義においても発揮されていたと思う。機知、ウィット、しゃれ、ユーモアを織りまぜた講義の裏には、学生の身になっての温情が籠っていたと思うのである。そう言えば、研究論文などにおける表現にも、随分気を使っておられたように思う。先生の前半期の論文は、中国関係という事情もあったが、漢文の文脈が見受けられ、その表記法も、いわゆる「漢字かなまじり文」で、漢字が主体で、かながまじっている状態である。後半期、大体第2次大戦後の時期に入ると、それが「かな漢字まじり文」にと、大きく転換している。論より証拠、先に引いた「王莽の社会思想について」から一節を取り出してみよう。

わたくしは、王莽の社会思想を、井田の復活と五均・六筭の設置を通じて、うかがった。そして、わたくしは、それらのもののおくに、今日においていうところのソーシャリズムに通ずる思想をみいだす。

そして、わたくしは、それを通じて、かれが周室至治の世を理想とし、それを実現せんとする意図をみとめる。しかるに、周室至治の世は、ゆめはるかなる遠いむかしの世界である。しかも、儒家の理想の産物にすぎぬ。そして、その意図は、「むかしをいまになすよしもがな」とするねがいに出づる。それは、必然にもとづくものではない。それは、進化の法則にそうものでもない。しよせん、それは、一のユートピア思想以外のものではない。〔経済論叢第97巻第3号（昭和41年3月）p. 287〕

こう見てくると、先生は「研究」と同時に「教育」の面にも随分心を砕いておられたように見受けられる。先生がよく引用される名言に

安井息軒曰く。ひとしくあめなり。堯はこれを見て以て老をやしなうべしと思ひ、
盗跖はこれを見て以て鍵をねやすべしと思ふ。（例えば経済論叢第96巻第1号p. 2）
という文章がある。テレビに向い、ひとしく落語を聴くに、我は以て娯楽に供せんと思ひ、先生はその話術の粋を摂りて以て教育に資せんと思われる。そんな心掛けの相異があったように思うのである。

先生は行住座臥、つねに研究と教育に精進された。正に夫子が「学びて厭かず、人をおし諭えて倦まず」と言うところと同工同曲である。先生には、さらに「其の人となりや憤を発して食を忘れ、楽みて憂を忘れ、老の将に至らんとするを知らず」（述而第七）という一面があったように思われる。それは、たとえば、「第三のカザノヴァ」（経済

論叢第96巻第1号)や、「王莽の社会思想について」の論文の中にうかがうことができる。

カザノーヴァといえば、ひとは、すぐ稀代の^{おんなたらし}(seducer)をおもう。それは、背倫であり勃徳である。かれは「神にそむくもの」・「罪あるもの」あるいは「悪徳の権化」と呼ばれ、悪名は天下にかくれもない。だが、はたして、かれは単なる^{おんなたらし}にすぎないか。その悪名は、かれの「回想録」から来る。世の士君子はこれを手にするを恥ずるといわれ、大方の父兄はこれを子弟に禁ずる。悪書のはしりである。

「回想録」において^{おんなたらし}の記述のみをみて、また、他をみざるは、これ、みるひと、その興味・関心ここにのみありて、また他をかえりみるにいとまがないからではないか。思うに「回想録」には18世紀ヨーロッパの風俗・習慣・社会・経済についての史料価値がみとめられる。ただし、それは18世紀における全欧の経済状態を主題としているものではない。だから、フォーカスをしばって、カザノーヴァにピントをあわせ、その経済人としてのプロフィールをえがくことは出来よう。ところが、すでにカザノーヴァを音楽の面からえがいて「他のカザノーヴァ」(The Other Casanova)と題する書物が出ているから、このエッセイの主題を「第三のカザノーヴァ」とする。

以上が、先生がこの論文をものされた動機をダイジェストしたものであり、The Third Casanova をえがかれる基本的な態度が示されている。

「王莽の社会思想について」にも、先生の公憤を感じる。今度は先生自ら語って戴こう。

十九世紀、西欧に出でたる、ユートピアン・ソーシャリストは、いづれも、その失敗にもかかわらず、人類愛の闘士として敬愛をうけている。思想界のバイオニアとして尊崇せられている。しかるに王莽のみは、そうでない。篡奪者として非難されている。偽善者として齟齬されている。冷血漢として憎悪せられている。かくて、ユートピアン・ソーシャリストとしてのかれの美はほとんどかえりみられていない。おなじく、ユートピアン・ソーシャリストであるにもかかわらず、その死後の運命のわかれること、何ぞ、それ、かくのごとくはなはだしきや。わたくしはそれをかなしむ。かれのために、一掬の涙なきを得ない。すなわち、いささか、かれのために弁じて、この一篇を草する、というのみ。地下の王莽の霊、はたして、わたくしの微意を受けるやいなや。

Casanova や王莽の立場・運命に対する、同情の涙、ヒューマニズムに根ざす懐疑・批判の精神が先生を駆って筆を執らしめた、という風に考えることは出来ないであろうか。そこにまた、『千万人といえども吾往かん』とする学問的情熱と、人間性に対する深い洞察とを見過すことは出来ないと思うのである。

一斎居士の言うとおりの、此の学は吾人一生の負担である。当に斃れて後已むべし（言志後録）である。先生は、よくこれを躬を以て実践せられた。ただ、死生の権は天に在り。当に順いて之を受くべし（言志録）である。古歌を引いて結びの語にかえさせて頂く。

あるときは ありのすさびに かたらわで

なくてぞひとの こいしかりける